（公財）東京都サッカー協会広報誌

Tokyo FA News

JFA DREAM 夢があるから強くなる
TOKYO FOOTBALL ASSOCIATION

巻頭特別企画

FC町田ゼルビア
大友健寿代表取締役社長
「町田から世界に羽ばたく」

TFA Pick Up

東京スタジアム巡り アリーナ立川立飛

TOPICS

アストラ倶楽部100周年

UNION NEWS

連盟ニュース

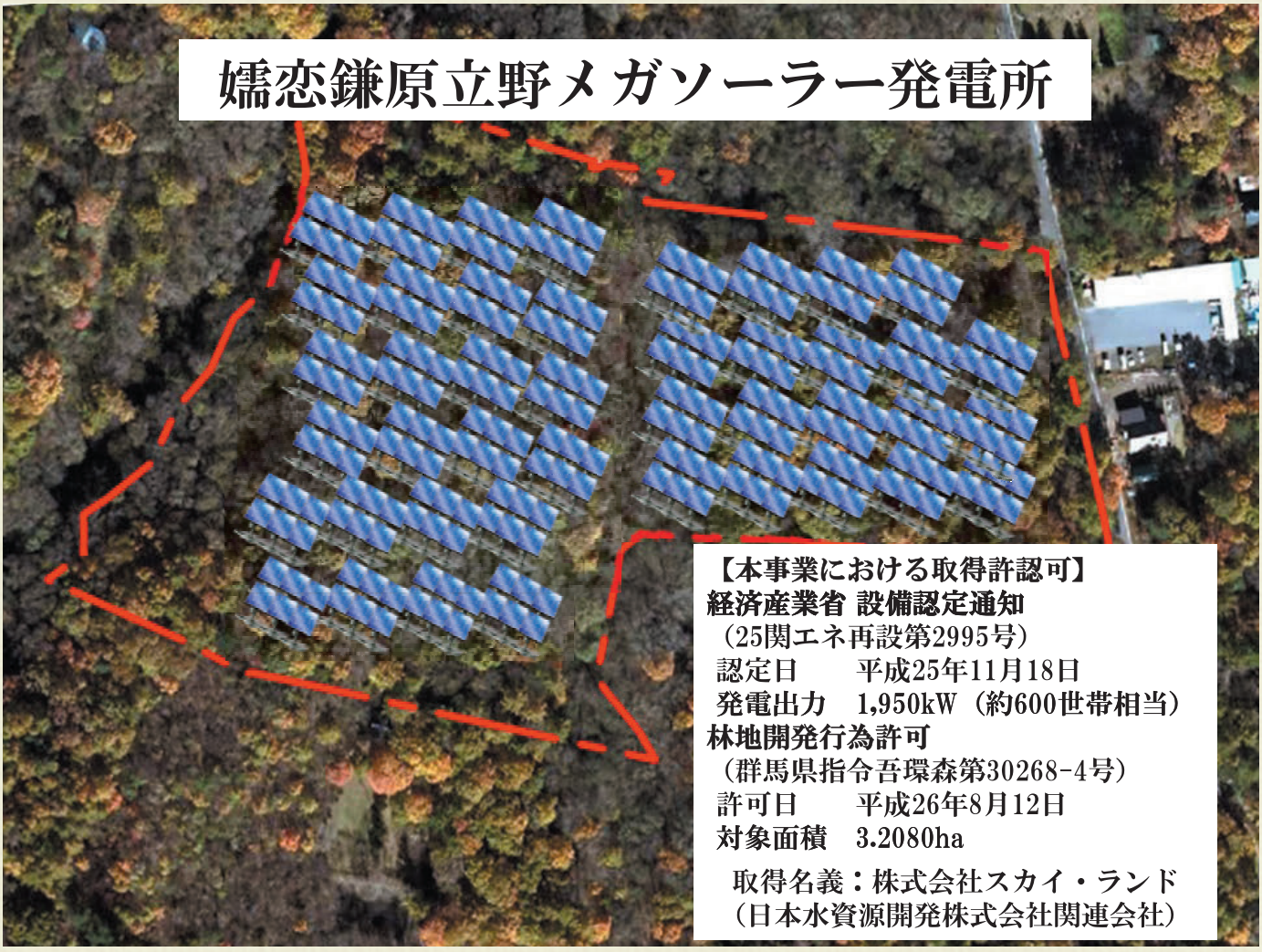
MATCH REPORT

JIFFインクルーシブフットボールフェスタ
JFA第42回全日本U-12少年サッカー選手権大会
第52回関東社会人サッカー大会
第27回全日本大学女子サッカー選手権大会
第6回11ブロックキッズフェスティバル

TOKYO FA NEWS 2019
Tokyo Football Association
Vol.30

「Tokyo FA News」は、東京都サッカー協会発行の広報誌です。
年2回、東京都のサッカーにまつわる情報を発行しています。

私たちは
東京都サッカー協会を
応援しています。



人を潤し自然を守る

ECO UP PROJECT

日本水資源開発株式会社

代表取締役 松永　利明

《東京営業所》
〒150-0031　東京都渋谷区桜丘町30-4　渋谷アジアマンション604
TEL 03-3477-2477　FAX 03-3477-7661
http://www.yuusui-no-mori.com/

東京スタジアム巡り 第6回
「アリーナ立川立飛（たちひ）」

東京のフットボールにまつわるスタジアムを紹介していく「東京スタジアム巡り」。第6回は日本フットサルリーグ（Fリーグ）に所属する立川・府中アスレティックFCがホームアリーナとしている「アリーナ立川立飛」。2017年10月に開場したばかりの多目的室内施設を探訪する。

施設概要			
所在地	〒190-0015 東京都立川市泉町500番4	コートの広さ	28.16m×55.33m （バスケットボールコート：最大2面、フットサルコート：1面、バレーボールコート：最大3面、バドミントンコート：最大9面、卓球：最大8面）
収容人員	3275人		
敷地面積	8368.13平方メートル （構造：S造地上2階建て）		
アクセス	多摩モノレール「立飛駅」から徒歩1分、立川バス「立飛駅」から徒歩1分		

PROFILE
株式会社立飛ホールディングス
代表取締役社長 **村山正道**

アリーナを中心に広がるまちづくり

体育館ではなく“アリーナ”。その本当の意味に気づかせてくれる場所がアリーナ立川立飛だ。立飛ホールディングスが保有するアリーナは、公共施設では実現できない柔軟な発想で、2017年10月の開場からわずか1年数カ月ながら利用者が増え続け、そのニーズに応えている。プロバスケットボールリーグ「Bリーグ」、日本フットサルリーグ「Fリーグ」、大坂なおみが出場した「東レ パン パシフィック オープンテニストーナメント2018」、大相撲立川立飛場所といったスポーツ興行を中心に、文化・芸術的あらゆる催しを開いてきた。

「民間企業だからできることがあると思っています。要望があれば深夜利用も可能ですし、365日24時間、稼働できます」（株式会社立飛ホールディングス・村山正道代表取締役社長）

全国に先駆けて展開されるアリーナビジネスの成功は官民問わず注目を集め、多くの関係者が日々、視察に訪れるのだという。利用者を第一に考えて建設された約3000人を収容する施設は、シンプルな構造ながら機能面にも優れている。特にスポーツ面では、「設計段階からプレーヤー側の経験のある人間が関わりました」と、選手から見た使いやすさを意識したプレーヤー目線にこだわった。同時に、観客の動線や女性客の利便性を考えた手洗い設備の充実など、見落としがちな細部も突き詰めた。

開場に際して、プロバスケットボールB1リーグ・アルバルク東京の試合でこけら落としされると、立川・府中アスレティックFCが参加するFリーグの6クラブ共同開催も実施。2018シーズンからは、立川・府中がこの施設を正式にホームアリーナとして、開幕前にはリーグカップ戦を開催するなど、現在では毎週のようにアリーナスポーツの公式戦が開かれている。FリーグにおけるLED照明を生かした選手入場シーンなど、フットサルの試合でほとんど味わえない“非日常”の空間を演出してきた。しかし、立飛グループの向かう視線は“アリーナ”にとどまらない。

「文化や芸術、スポーツに力を入れて、これまでにないようなまちづくりをしていく」

村山社長がそう話すように、アリーナはあくまで拠点の一つであり、周辺施設と併せたまちづくりの一環なのだ。多摩モノレール「立飛駅」から徒歩1分という好立地の反対側には「ららぽーと立川立飛」があり、隣にはBBQができ、本格的なコートでビーチスポーツが楽しめる人工ビーチ「タチヒビーチ」が並ぶ。まさに1日中、「立飛」を満喫できる。さらに立川北駅にある国営昭和記念公園東の旧国有地では、温泉を楽しめるホテルや2500人収容の音楽ホール、オフィスビルや商業施設が入る大規模な複合開発が進み、2020年春のオープンを目指している。かつて飛行機製造会社として隆盛した立飛ホールディングスが保有する土地は約98万平方メートルにおよび、同社はこの土地の開発を使命と捉えている。

「立川は東京のほぼ真ん中に位置しています。今、もっとも成長の余地がある場所はここしかありません。『立飛』を多くの人に知ってもらいたいですし、豊かな自然と都市機能の両方がある地域にすることで、人の流れを変えていきたい」

ビーチを楽しみ、フットサルに熱狂して、家族で買い物をして、食事をして、ホテルに宿泊する。アリーナを一つのフックにした、人々の生活を豊かにする場所が、ここ立飛にある。

2016年12月
「（仮称）アリーナ立川立飛」の建設を発表
2017年6月23日
アルバルク東京がB.LEAGUE 2017-2018シーズン ホームゲーム開催アリーナとすることを発表
2017年10月
アリーナ立川立飛が竣工。
14日にアルバルク東京のホームゲームでこけら落とし、21日にFリーグの6クラブ共同開催を実施
2017年12月27日
2018年度から立川・府中アスレティックFCがホームアリーナとすることをクラブが発表
2018年1月13日
「ハンドボール男子代表戦 インターナショナルマッチ（アジア選手権壮行試合）」開催
2018年3月12-13日
「第10回アジア新体操選手権、第16回アジアジュニア新体操選手権大会日本代表選考会」開催
2018年3月17-18日
「第1回さえき食育フェスタ」開催
2018年5月25-27日、6月2-3日
Fリーグのリーグカップ戦「Fリーグオーシャンカップ」を開催
2018年6月10日
「KING OF PRISM Rose Party 2018」開催
2018年7月9日
アルバルク東京がB.LEAGUE 2018-2019シーズン ホームゲーム開催アリーナとすることを発表
2018年8月22日
「平成30年夏巡業 大相撲立川立飛場所」開催
2018年9月15-23日
「東レ パン パシフィック オープンテニストーナメント2018」開催
2017-2018、2018-2019 B1リーグ
アルバルク東京レギュラーシーズンホームゲーム26試合開催

「立飛」にまつわるエピソード①

戦前・戦後の日本の空を支えた“立飛”

写真提供：航空ファン

立飛とは地名ではなく立飛グループの前身である「立川飛行機」の短縮表記に由来する。同社はかつて「赤とんぼ」、「隼」といった50機種1万機弱の飛行機を製造。戦前・戦後の“日本の空”を支えた。その飛行場跡地の再開発の一環として2015年に三井不動産との協働でららぽーと立川立飛を開業したところから、「立川立飛」を称するまちづくりが始まった。

「立飛」にまつわるエピソード②

2つのスポーツクラブのホームゲーム開催地として

アリーナ立川立飛は現在、B1リーグのアルバルク東京とFリーグの立川・府中アスレティックFCのホームアリーナに登録。立川・府中は2017シーズンまで府中市立総合体育館を本拠地として活動していたが、同施設のFリーグ開催の認可が下りなくなったため、2018シーズンから「立川市」をホームタウンに加え、アリーナ立川立飛を新ホームアリーナとして再スタートした。

SPECIAL INTERVEW

FC 町田ゼルビア
代表取締役社長
大友健寿
「町田から世界に羽ばたく」

2018 シーズン、J2 リーグで過去最高順位の 4 位と大躍進を果たした FC 町田ゼルビア。
そんなクラブを支えるのが町田で生まれ育った大友健寿社長だ。
2018 年 4 月から J1 昇格を目指すクラブの舵取りを任された 41 歳の青年社長が見据える未来は。

アマチュアリーグへの降格がターニングポイントになった

――大友社長がサッカーを始めたきっかけは。

小学2年生からサッカーを始めて、5年生でFC町田という町田市の小学生年代の選抜チームに入りました。プレースタイルはストライカーといいますか、たくさんゴールを決めていました。FC町田は日本で一番強かった静岡の清水FCに勝つために結成されたチームです。

――FC町田のトップチームであるゼルビアに関わるようになったのは。

実を言うと、大学を卒業するまではゼルビアがあることを知りませんでした。社会人になってサッカーをしようかどうか迷っていたところ、友人からFC町田のOB選手が中心になって作った社会人チームがあることを教えられ、それがゼルビアだったんです。

――仕事とサッカーの両立は大変だったのでは。

そうですね。当時の職場が浜松町だったので仕事が終わってから、車で高速を飛ばして練習に通っていました。ただ、FC町田の出身者ですから、みんな止める、蹴るがうまかった。そういう中でサッカーをするのは楽しかったですね。

――フロント入りしたきっかけは何だったのでしょう。

2003年にトップチームを運営するNPO法人アスレチッククラブ町田を立ち上げて、Jリーグ入りを目指していました。若くていい選手が入ってきたので、私自身は選手としての限界を感じていたところ、フロントに入ってくれないかと頼まれたんです。それで会社に辞表を出しました。今振り返っても、思い切ったことをしましたね（笑）。

――そこからJリーグに行くまでは苦労もあったのでは。

町田がサッカーというキーワードで一つになるというイメージは持っていましたし、そういう土壌があると思っていました。当時はサッカー協会に登録している選手は4000人近くいましたから。みんなサッカーをやっているんですよ。そうしたサッカー熱があったのは大きかったですね。

――2012年に待望のJ2昇格を果たしましたが、そのシーズンに最下位でJFLに降格しました。今はJ2から降格してもJ3がありますが、当時はなかったので、Jクラブですらなくなってしまう。ダメージは大きかったのではないでしょうか。

大きかったです。Jリーグからアマチュアリーグへの降格ですから、チームが消滅してもおかしくありません。ただ、降格しても地元の方々は変わらずご支援くださいました。「また頑張れよ」と言ってくださる方ばかりで……。だからこそ、Jリーグに早く戻って恩返しをしなければいけないなと感じました。この降格をきっかけに、クラブの内部でも変革がありました。下川（浩之＝前取締役社長、現会長）が私や、丸山（竜平＝強化部長）などを責任者のポストに引き上げてくれたのです。若い人間に任せようという考えがあったのかもしれません。2013年は、JFLで4位と苦しみましたが、あの年があったから今があると思います。

――最寄駅から徒歩でスタジアムに向かう「男気コース企画」などユニークな企画をたくさん行っている印象があります。

首都圏にはJリーグのクラブがゼルビア以外にもたくさんありますし、面白いことをやっていないとメディアに取り上げていただけません。潤沢なPR予算がない中で、どうやって興味を持ってもらうのか。町田市立陸上競

2019年シーズンは再就任から6年目を迎えた相馬直樹監督の下でJ2優勝を目指す

技場にどうやって来てもらうのか。そういうことを常に社員が考えています。小さいクラブなので、うまくいかなくてもまたチャレンジすればいいという前向きな雰囲気があるとは思います。

――2015年には今回の取材場所でもあるゼルビアキッチンができました。一般向けの食堂をクラブが運営するのは珍しいケースです。

栄養面は長年の課題でした。プロクラブとして、トップの選手はもちろん、未来を担うアカデミーの選手にもしっかりした栄養をとらせてあげたいという思いがありました。そこで一般向けの食堂を運営して、そこを選手たちの食堂にしようというアイデアが出てきました。選手と市民の方の交流の場になっていますし、アウェーゲームの時はここに集まって、みんなでビールを飲みながら応援する。一つのコミュニティになっています。

Ｊ１昇格のために クラブとして

――2018年4月に前社長の下川さんが会長になって、大友さんが社長に就任しました。

前社長の下川がJリーグの理事になったのですが、そのタイミングで「社長をやらないか」と打診をされました。驚きましたが、クラブOBとして使命を感じ、お引き受け致しました。

――自分が社長になったことで、こういうところを変えたいというのはありますか。

私たちのチーム予算はJ2の中でも十分とは言えません。相馬監督はその中でやりくりしてくれていますが、J1昇格を目指すのであれば課題は山積みです。また、ゼルビアはJ1ライセンスがないので、J1に上がるためにはクラブハウスやトレーニング施設も必要になります。それは現場の頑張りだけで解決できるものではありません。

――大友社長就任から4カ月後に渋谷に本社があるIT企業大手のサイバーエージェント株式会社がゼルビアの株式を取得すると発表されました。FC町田のトップチームというルーツを持つゼルビアに、IT企業の資本が入るのは賛否両論もあったと思います。

サイバーエージェントの藤田（晋）社長とは何度も話し合いを持ってきましたが、ゼルビアがこれまでやってきたもの、スタッフを尊重してくれました。賛否両論があるのはわかっていましたが、クラブの未来を考えた時に何がベストなのかを考えた末の決断でした。ゼルビアに来てくれて、ここが好きだと言ってくれている選手が、J1のクラブやJ1を狙えるクラブに移籍せざるをえないのを何とかしたかった。幸い、地元のみなさんにも理解を得られていると思っています。

――2014年にJ3に参入し、2016年にJ2に復帰。2018年にはJ2で一時は首位に立って4位で過去最高成績をおさめました。

©FC MACHIDA ZELVIA

「男気コース企画」（写真左下）などユニークな仕掛けでファンを楽しませる

J1を現実的に狙えるだけのチーム力があるうちに、クラブとして目標をつかみにいきたいと思っています。これまではイーグル建創さんなど地元企業からのサポートがほとんどでしたが、東京全体へ視野を広げる必要も感じています。実は、今回の話がある何年も前から「東京」をチーム名につけたほうがよいのではという議論はしていました。慎重な議論が必要ではありますが、ゼルビアの未来のために何がベストなのかというのは常に模索していきたいと思います。

――昨シーズンはJ1昇格プレーオフの出場権を獲得しながらもJ1ライセンスがないために出場できませんでした。2019年はどのような目標を設定していますか。

クラブとしてはJ1に上がれるように準備をしていきます。クラブハウスもそうですし、トレーニング施設もそうですし、J1ライセンスの取得のために必要なハード面の整備が最優先課題です。そうした見通しを立てて、6月のJリーグクラブライセンス申請でJ1ライセンスの申請を行えるようにするのが一つの目標になります。J2で何位になるということについては、相馬監督をはじめとして現場のスタッフや選手に頑張ってもらうしかありません。そこをフォローしていく、支えていくのがフロントスタッフの役割だと思っています。

――ゼルビアが1989年に設立されてから30年。この2019年はクラブの歴史においても大きな1年になるのではないでしょうか。

はい、自分たちの目標をつかむためには、あらゆる面でレベルアップが必要です。町田に必要とされるように、子どもたちの夢になれるように、私たちにできることをやっていきたいと思います。

FC町田ゼルビアヒストリー

1989年	FC町田のトップチームを創設。初代監督は重田貞夫
1990年	東京都サッカー協会、東京都社会人サッカー連盟へチーム登録
1991年	東京都社会人サッカーリーグ4部参加
1997年	FC町田ゼルビアにチーム名変更
2003年	NPO法人アスレチッククラブ町田設立
2006年	関東サッカーリーグ2部優勝
2007年	関東サッカーリーグ1部優勝
2008年	株式会社ゼルビア設立 全国地域サッカーリーグ決勝大会で優勝してJFL昇格
2009年	Jリーグ準加盟クラブに承認
2012年	J2リーグ参入するも1シーズンでJFL降格
2014年	J3リーグ参入、相馬直樹監督が2度目の就任
2016年	J2リーグ昇格
2018年	J2リーグ4位（過去最高成績）。大友健寿が新社長に就任

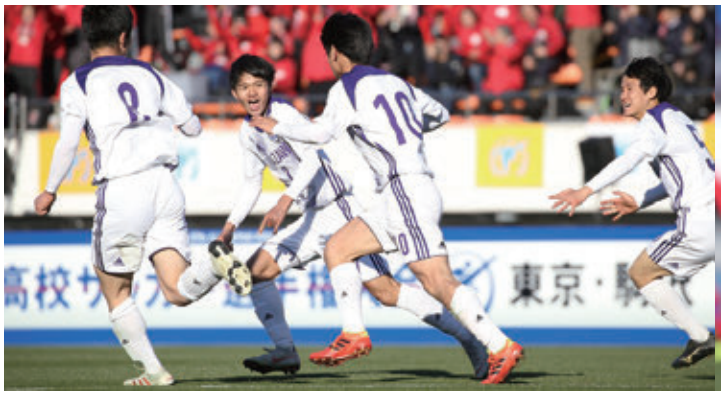
PROFILE

大友健寿（おおとも・たけひさ）

1977年5月19日生まれ、東京都町田市出身。少年時代はFC町田ゼルビアの前身となった町田市の小学生年代の選抜チーム「FC町田」で活躍する。東海大学卒業後、社会人リーグ時代のFC町田ゼルビアで6年間プレー。現役引退後、フロントスタッフとしてJリーグを目指すクラブを支える。営業担当、事業部長、取締役を経て、2018年4月より取締役社長、同年12月代表取締役社長に就任。J1昇格を目指す。

駒澤大高、国士舘の初戦突破ならず

第 97 回全国高校サッカー選手権大会



主　催：公益財団法人日本サッカー協会、公益財団法人全国高等学校体育連盟、民間放送 43 社
日　時：2018 年 12 月 30 日～ 2019 年 1 月 14 日　　会　場：駒沢陸上競技場、味の素フィールド西が丘 他

「第 97 回全国高校サッカー選手権大会」に東京都代表として出場した駒澤大学高校と国士舘高校。両校の全国での戦いをレポートする。

大観衆の中で開幕戦を戦った、駒澤大学高校

駒澤大高 1－1 那 覇 西
1（前半）0
0（後半）1
（9（PK）10）

15年ぶりの選手権出場となった、国士舘高校

国 士 舘 0－1 米 子 北
0（前半）1
0（後半）0

先制点を決めるが、実力を発揮できずにPK戦で姿を消す

ゴールキーパーのキックで勝敗が付き、ピッチに白いユニフォームの選手たちが倒れ込む。東京B代表として高校選手権に臨んだ駒澤大学高校だったが、11人目までもつれたPK戦の末に那覇西高校に敗れ、2年ぶりの初戦突破はならなかった。

13,577人の観衆が詰め掛けた開幕戦。風上の駒澤大高が立ち上がりからセットプレーを中心に押し込むと、36分にはFW原田大渡が豪快なボレーで先制点を叩き出す。だが、「リズムはあまり良くなかった」（MF江藤惇裕）「自分たちのやりたいことも、やるべきこともできていなかった」（GK宮崎雅崇）と、選手たちは手応えを掴めずに前半を終える。

すると、56分に目の覚めるようなミドルシュートで失点を許し、65分にはDF島田竜汰が、70分には宮崎がそれぞれピンチを水際で食い止めるなど、後半は苦しい展開に。終了間際の80分にMF涌井蓮が決定機を掴むも、相手GKがファインセーブ。2回戦進出の行方はPK戦に委ねられる。

「心のどこかで隙があった」と大野祥司監督

お互いに1人ずつ外して迎えた、GKが蹴り合う11人目。先攻の駒澤大高は「ど真ん中に思いっきり蹴った」宮崎のキックが弾き出され、後攻のキックはゴールネットを揺らす。「自分が決めていれば勝てたので不甲斐ないです」と唇を噛んだのは、1人目で枠を外したキャプテンのDF齋藤我空。200人を超える部員を含めた大応援団の拍手に送られながら、彼らの選手権は幕を閉じた。

試合後。大野祥司監督は自身に敗因を求めた。「私も慢心があったのかなと。慣れというか、やっぱり心のどこかで隙があって、フワフワしている私の姿が選手に移ってしまったのかもしれません」。選手も悔しげな表情が並ぶ。「何もできないまま終わった感じでした」（MF細川竜征）「もったいない試合というのが正直な感想です」（涌井）。PK負けという結果以上に、80分間の出来へ不甲斐なさが滲む。実力では決して劣っていなかっただけに、勝利を逃したことで、チーム全体を包んでいた喪失感が印象的だった。

初戦敗退も15年ぶりの全国の舞台がチームの大きな財産に

「8月16日から4カ月、1年の3分の1も選手権をやるとは思わなかったですね」。上野晃慈監督はそう口にして、晴れやかな笑顔を浮かべる。真夏の1次予選から8連勝で辿り着いた憧れの舞台で、東京A代表の国士舘高校は確かな成長の跡を同校の歴史に刻んだ。

15年ぶりに東京を制し、全国へ乗り込んだ国士舘。強豪米子北高校を相手にした1回戦は、「最初は緊張していたのか、みんな硬かった」（CB永吉風太）時間帯の開始7分で先制を許し、早くもビハインドを背負ってしまう。

それでも、相手の「感じたことのないようなレベル」（FW柳陽哉）の圧力にも慣れてきてからは、少しずつ惜しいシーンを創り出す。27分にはDF菊地駿斗のFKに、FW田中壮太が合わせたヘディングは枠の上へ。逆に29分と40分のピンチは共にGK小松直登が好セーブ。追加点は許さない。

後半は交替選手が流れを引き寄せ、攻撃の手数が増えると、72分には途中出場のMF荘原聡のクロスを、やはり途中出場のFW中島隆之介が繋ぎ、田中が決定的なシュートを放つも、GKに阻まれて同点には至らず。「プレーのスピード感が全然違いました」（FW丸山龍基）「やっぱりプレミアリーグって感じはしました」（MF長谷川翔）と2人が声を揃えた強豪相手に奮戦したものの、4度目の挑戦だった全国での初戦突破は、またしてもお預けとなった。

ただ、選手たちは晴れ舞台を楽しんでいたようだ。「注目度も高くて、緊張もあったんですけど、楽しくやることができました」（菊地）「憧れていた舞台でみんなとサッカーできたので、人生の中で最高の思い出になったと思います」（長谷川）。話を聞いても一様に“やりきった感”が漂っていた。

「手応えがあった」と上野晃慈監督

上野監督はこう総括する。「僕はコーチで3回全国に出ていますが、過去の3回より今回は手応えがありました。彼らには前向きな明るさがあって、いつも通りリラックスしてやっていたのも頼もしくて、勝ちは拾えなかったですけど、国士舘高校サッカー部の新しい1ページにはなったかなと思っています」。1年の3分の1を掛けて戦ってきた彼らの選手権は、チームのこれからにとっても大きな財産となったに違いない。

サッカーを通して障がい児・者と健常児・者の心のバリアフリーを実現
「JIFF インクルーシブフットボールフェスタ2018」

主　催：一般社団法人日本障がい者サッカー連盟（JIFF）　　日　時：2018年12月23日　　会　場：フットサルステージ

「JIFF インクルーシブフットボールフェスタ 2018」が 2018 年 12 月 23 日、多摩市のフットサルステージで行われた。「サッカーを通じて障がい児・者と健常児・者の心のバリアを取り除くこと」を目的に 2016 年にスタートした同フェスタも今年で３回目。今回も 300 人を超える人たちが集まった。

多様性を尊重して、最後まで笑顔が絶えない時間に

イベントは２部構成で、午前の部は「障がい者サッカー体験会」と「キフティング」を開催。体験会では「電動車椅子サッカー」、視覚に障害を持った選手がプレーできるように考案された「ブラインドサッカー」、主に上肢、下肢の切断障害を持った選手がプレーする「アンプティサッカー」の３つの体験が行われ、障がい者スポーツにも造詣の深いMCのこにわ氏による小ネタを挟んだ軽快な語りも会場を盛り上げた。

電動車椅子サッカー体験では子供たちがスタッフのレクチャーを受けながらひとりで車椅子を運転、専用のボールをドリブルするまでを体験。ブラインドサッカー体験では実際に目隠しをしてのパス交換から、ゴール裏に声でボールやゴールの位置を教えるガイド（コーラー）といわれる案内役を立たせてのドリブルシュートが行われた。アンプティサッカー体験ではクラッチと呼ばれる杖で身体を支えながら片足でプレー。常に片足立ちの状態、ドリブルも蹴り足も同じという想像以上のハードさに参加者は悪戦苦闘しながらもみんなが笑顔でプレーしていた。

そして、今回新たな試みとして行われたのがキフティング（寄付×リフティング）だ。リフティング１回につき10円を寄付するという寄付企画。３回までチャレンジ可能、トータル100回成功したら終了というもので、集まった寄付金は「JFA平成30年７月豪雨 義援金」に寄付されるという。この日は午前の部のみの開催だったものの、JIFFの北澤豪会長、2017シーズン限りで現役を引退したゲストの石川直宏FC東京クラブコニュニケーターも含め60名が企画にチャレンジ。子供たちは楽しみながら、寄付することを学んだ。

午後の部では北澤会長や石川氏も混ざり、障がいの有無や種別などの違いを超え、障がい者と健常者が混合チームでサッカーを楽しむ「インクルーシブフットボール」と、こちらも新企画の「まぜこぜスマイルサッカー」を実施。「まぜこぜ－」も障がいの有無や年齢、性別、サッカー経験などを超えて一緒に楽しめるインクルーシブフットボールのひとつだが、こちらは「ウォーキングサッカー（歩くサッカー）」を導入。走る、ヘディング、チャージを禁止とし、普段と異なる形態やルールでプレーしている各障がい者サッカー選手もともにプレーできるよう一部特別ルールを設置、電動車椅子やブラインドサッカー選手も同じピッチでプレーできるようにした競技で、ピッチ内には多様性を尊重する、まさに「インクルーシブ」な世界が実現していた。最後まで笑顔の絶えない中で第３回インクルーシブフェスタは閉幕した。

北澤豪会長（右）とゲストの石川直宏氏（左）

イベントを終え、北澤会長は「今日もみんな普通にサッカーの話をしていただけで、障がいの話なんて一切していない。そこにあったのは同じサッカー選手としての目線だけ。でも最初はそうじゃなかった。だからそこの変化はすごく大きいと思う。やっぱりそれは続けていかないと生まれないものだなと感じる」と３回目を迎えたイベントに手応えを語った。

ゲストの石川氏は「僕の中で障がいというより、いろいろな個性を持っている方々がそれぞれの感覚や想いをひとつにしてやっていて、すごく一体感を感じた。また、FC東京や東京ヴェルディ、町田ゼルビアやフットサルクラブなど、普段東京都で活動している人たちがこうやってひとつになって盛り上げていく、そういう想いがひとつになればいろいろなことが可能だと思うので、僕としてはFC東京の中でそういう価値を伝えていきたい。（こういったイベントを）東京から発信することに意味がある。今後スポーツやサッカーの価値という部分ではオリンピック、パラリンピックもある。いろいろな可能性があるんじゃないかなと思う」と振り返った。

「インクルーシブフットボール」とは障がいの有無や種別などの違いを超え、障がい者と健常者が混合チームで一緒に楽しむサッカー。

東京ヴェルディジュニアがコンビネーションを生かし、ベスト8!

10年ぶりに出場した東京ヴェルディジュニア

JFA 第 42 回 全日本U-12 サッカー選手権大会

主　　催：公益財団法人日本サッカー協会、公益財団法人日本スポーツ協会、日本スポーツ少年団、読売新聞社
日　　時：2018 年 12 月 26 日～ 12 月 29 日
会　　場：白波スタジアム、鹿児島ふれあいスポーツランド 他
試合時間：40 分（8 人制サッカー）

JFA 第 42 回全日本U－ 12 サッカー選手権大会が 12 月下旬に鹿児島県で開催され、東京都からは東京ヴェルディジュニアが出場。コンビネーションを生かしてゴールに迫るサッカーを見せ、ベスト 8 入りを果たした。

グループリーグを２勝１敗で勝ち抜けて決勝トーナメントに進出

第42回全日本U－12サッカー選手権大会が12月25日から鹿児島県で行われ、10年ぶりにこの大会に出場した東京ヴェルディジュニアはベスト８に入った。

全国から48チームが出場。４チームずつに分けられたグループリーグの１位12チームと２位の中の上位４チームが決勝ラウンドに勝ち上がる。ヴェルディは前年度準優勝の北海道コンサドーレ札幌U－12や２年連続出場のSSS FC（スリーエス・山口）など難敵がひしめくグループＪに入った。

試合は20分ハーフで、初戦は小雨の降る中、スリーエスと対戦した。堅さのある立ち上がりとなったが、14分にコーナーキックのチャンスを掴むと、こぼれ球を惟住圭斗が決めヴェルディが先制する。「セットプレーの練習もしてきていた。こういう試合でのセットプレーの大事さは、選手たちも理解できている」（蓮見知弘監督）。このゴールで緊張が解けたヴェルディは、終始ゲームを優位に進め試合終盤にも追加点を挙げて２－０で快勝する。

しかし、都大会で見せたような細かなパスコンビネーションは初戦では出し切れなかった。蓮見監督は「普段は人工芝で練習しているので、天然芝のピッチ環境に付いていかなかった。雨でボールスピードが上がったのは助かったが、まだ物足りない」と強調。第２戦ではピッチへの順応が進み、惟住と半場朔人がハットトリックを決めるなど、７－１で勝利した。

アイデアを出したのが競技２日目に行われたグループリーグ第３戦の北海道コンサドーレ札幌戦だった。札幌は長身選手が多く、ヴェルディは相手への対策を兼ねて徹底してボールをつないだ。コーナーキックもショートコーナーに変更。相手の高さに対して、セットプレーでも足下の技術を生かしてゴールに迫ろうとしたのだ。

ゲームは０－２で惜敗を喫するものの、体格差のある相手にもチャレンジを続け、サッカーへの自信は深まった。ヴェルディはグループリーグ２位。１位通過こそ逃したが、２位の中で上位に入り決勝トーナメント進出を決めた。

ヴェルディらしいサッカーでベスト８進出

鹿島アントラーズつくば（茨城）と対戦するラウンド16に向け、蓮見監督は「チームで攻撃するような場面が増えるよう修正したい」とパスサッカーを再び徹底。その狙いに選手たちも呼応した。ボールをつなぐことで鹿島戦もチャンスを作り、５分に浅岡祐輝が幸先良く先制。パスワークを生かし、グラウンダーのクロスから惟住も追加点を挙げる。後半は鹿島の分厚い攻撃を受けるが、ＧＫ秦瑞貴がファインセーブを見せたり、山本丈偉がスペースを埋めたりしてピンチを耐え、２－０で勝利。「守備も粘り強くでき、最後まで集中が切れなかった」（山本）と手応えの白星となった。

結果

○グループ J

SSS FC（山口県）	0-2	東京ヴェルディジュニア
東京ヴェルディジュニア	7-1	ヴェルディ SS 岩手 U-12（岩手県）
東京ヴェルディジュニア	0-2	北海道コンサドーレ札幌 U-12（北海道）

○ラウンド 16

鹿島アントラーズつくばジュニア（茨城県）	0-2	東京ヴェルディジュニア

○準々決勝

大阪市ジュネッス FC（大阪府 2）	3-1	東京ヴェルディジュニア

ベスト８まで勝ち上がったヴェルディ。準々決勝では、18年夏のバーモントカップ第28回全日本U―12フットサル選手権大会を制している大阪市ジュネッスＦＣ（大阪）と対戦した。

相手もコンビネーションと球際の強さに特徴があり、中盤で激しく奪い合うゲーム展開となった。ヴェルディは攻撃局面では精度の高いパスワークで前線にボールを渡し、チャンスを拡大する。８分には井上から左サイドに展開。浅岡のクロスを半場がしずめ、先制点を奪取した。ただ時間の経過とともに相手FWの動きを制限できなくなり、逆転を許してしまう。

蓮見監督は「ボールに執着したプレーを出し切れていなかった」と前半を分析し、ハーフタイムでメンタルと戦術を同時に修正。後半は的確なパスを出せる山本がボールに多く触り、前を向いたプレーが増えていく。しかし33分にジュネッスに追加点を決められ、１－３に。終盤は攻め込んだがスコアは動かせず、ヴェルディジュニアの全国大会での挑戦は準々決勝で幕を閉じた。

ボールを保持しながら攻撃を進めるというヴェルディらしいサッカー。全国の舞台でも通用するという収穫を得るとともに、このスタイルゆえに天然芝にどう適応するかという課題も見つかった。

「選手はよく頑張っていたが、チームで頑張りきれなかった。スキルだけではなく、どんな状況でも自分たちのサッカーが出せるメンタリティーを鍛えていきたい」

蓮見監督は選手をたたえるとともに、今後のチーム力強化にも思いを巡らせた。

COMMENT

蓮見知弘監督

大きい選手が少ないので、セットプレーからであっても崩せるシーンがあったら足下でチャレンジしています。準々決勝は選手個人としては頑張ってくれましたが、チームとして頑張りきれず、誰かがこう行ったら、自分はこう狙うとか、そういったところは出せませんでした。普段は人工芝で練習しているので、天然芝でのやり方は少し変えていかないといけないと思います。

COMMENT

山本丈偉選手

みんなで声を掛け合って、ボールを大事にして、守備も粘り強くするサッカーをやってきました。最後の試合はあまり自分たちのプレーを出せず、負けてしまったのは悔しいです。天然芝の難しさはありましたが、3試合目くらいからは慣れてきました。最後の試合はマークのミスがあって負けてしまったので、そういうところも細かく練習からやっていきたいです。

Criacao Shinjuku が地元開催で、関東社会人サッカー大会初制覇!

Criacao Shinjukuは関東社会人大会初優勝で、関東リーグ２部への昇格を手にした。

第 52 回関東社会人サッカー大会

主　催：一般社団法人関東サッカー協会、関東社会人サッカー連盟
日　時：2018 年 11 月 3 日（土）～ 18 日（日）
会　場：味の素フィールド西が丘 他

関東各都県代表の 15 チームと開催地代表１チームを加えた計 16 チームがトーナメント方式で優勝を争う「第 52 回関東社会人サッカー大会」が東京都で開催された。
東京都２位で出場した Criacao Shinjuku が大会初制覇を飾った。

準決勝はアディショナルタイムに石川が劇的決勝弾

試合終了の笛が吹かれたピッチには、夕日で照らされた選手たちの影が長くのびる。

2010年以来、８年ぶりに東京都で開催された第52回関東社会人サッカー大会。この大会に東京都代表として挑んだ４チームのうち、ベスト４に唯一進出したのが東京２位のCriacao Shinjuku（クリアソン シンジュク）。これまでに4度この大会に挑戦しながらも、この準決勝は彼らが越えることが出来なかった壁でもあった。「勝って関東２部に昇格するために、この大会は絶対に優勝するんだという強い気持ちをチームで持っていた」と成山一郎監督が試合後に語ったように、チームは神奈川１位の品川CC横浜を相手に、それをのり越えた先を見据えるような堂々たる戦いを見せた。

試合は序盤から力の拮抗した好ゲームとなった。Criacaoは水戸ホーリーホック、ガイナーレ鳥取などでJリーガーとしての経験も豊富なFW岡本達也をターゲットマンにした攻撃と、ボランチ石川大貴が中心となった積極的なプレスが持ち味。品川CC横浜もその間隙を縫うようにして、個々の判断の速さを活かしたパスワークから、前線の決定力あるストライカー友澤剛気ら攻撃陣にボールを預け、虎視眈々とゴールを狙う。前半は互いに決定的チャンスもあったものの、スコアレスで終了し後半へと折り返す。

拮抗した試合の流れは、後半に入って徐々にCriacaoが掴んでいく。前半から全く緩むことのないCriacaoの執拗なプレスがボディブローのように効きはじめ、品川CC横浜の持ち味でもある選手間のバランスが徐々に崩れ、それによって出来たスペースを使えるようになったCriacaoがボールを握る時間が増えていく。

攻撃にゆとりを感じさせるようになったCriacaoは、左サイドではMF金島遼が何度もチャンスを作り出し、石川大貴とのコンビネーションから、FW岡本達也、MF増田湧介らが、よりゴールに近いエリアに侵入していく。スペースが出来たことで、その存在感を増していったボランチ石川大貴の卓越したキープ力と変幻自在なパスセンスという「色」が加わったCriacaoの攻撃は、前半とはまるで違うチームであるかのような多彩なものとなり、時計が進むにつれて品川CC横浜は守備に負われる場面が増えていった。

後半は終始試合を優勢に進めながらも、相手GKの好セーブもあって、なかなかゴールを奪うことが出来ない。試合の残り時間も僅かとなった後半42分、この危険な時間帯にCriacaoは最大のピンチを迎える。相手スローインから隙を突かれ、品川CC横浜ストライカー友澤剛気との決定的な１対１の場面を作られてしまったのだ。しかし、この最大のピンチもGK村下将梧のビッグセーブによって辛うじて切り抜けた。

西が丘での準決勝は品川CC横浜と一進一退の好ゲームを演じたCriacao Shinjukuが劇的ゴールで制した。

Criacaoに劇的なゴールが生まれたのは後半アディショナルタイムだった。MF矢吹龍磨の蹴った右からのコーナーキックに、交代出場していたFW原田亮が中央でヘディングに競り勝ち、そのこぼれ球に飛び込んだ石川大貴がゴールネットの天井部分にボールを突き刺すように蹴り込んだ。

この貴重なゴールによってCriacaoは難敵品川CC横浜に対して１－０で勝利するとともに、クラブ初となる関東社会人サッカー大会決勝進出を果たし、来シーズンの関東リーグ２部昇格を大きくたぐり寄せることに成功した。

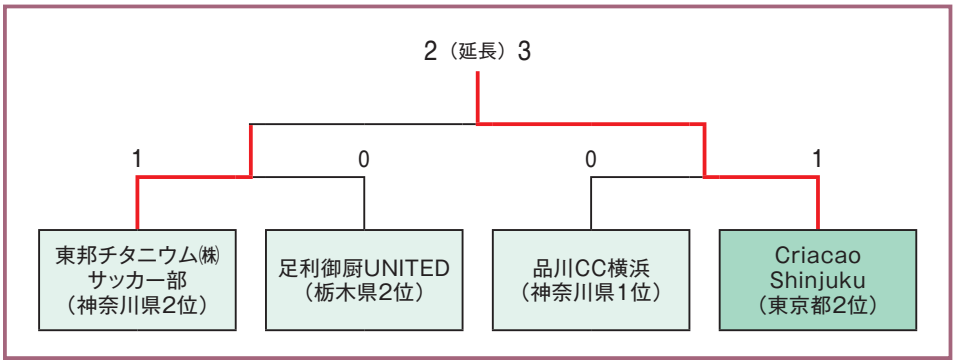
「感動を与えられる存在になりたい」。試合後にこう語った成山一郎監督。この「感動」の一端を試合後にピッチでクールダウンをする選手たちの様子に垣間見た気がした。

一足早くそれを終えた主将の金裕士（キム・ユサ）に話を聞く。「今季、成山監督が就任するまでは、練習も試合も選手が中心で行っていた。越えられなかった壁を何故越えられたのかと言えば、監督の存在は間違いなく大きい」。そう謙虚に語りながらも、激戦後のクールダウンを促しているのは、この主将を中心とした選手たちだった。

「品川CC横浜さんが相手だったから、僕らも力を引き出してもらえたわけで、いい仲間とサッカーが出来るから、チームに貢献しようと選手たちも思ってくれる。こうした環境が、チームの成長、選手の成長に繋がる好循環を生んでいくと思っています」。成山一郎監督のこの言葉通り、Criacaoから感動をもらったような気がした。Criacaoは翌日、東邦チタニウム㈱サッカー部を延長戦の末に制して、大会初優勝を飾った。

「監督の存在が大きい」と主将の金裕士選手

「感動を与えられる存在になりたい」と語った成山一郎監督



早稲田大4連覇ならず
第 27 回全日本大学女子サッカー選手権大会

「競創」を掲げて今季を戦った、早稲田大学ア式蹴球部女子部

主　催：公益財団法人日本サッカー協会、
　　一般財団法人全日本大学女子サッカー連盟、朝日新聞社
日　時：2018 年 12 月 23 日～ 2019 年 1 月 20 日
会　場：味の素フィールド西が丘 他

第 27 回全日本大学女子サッカー選手権大会・決勝が 1 月 20 日に行われ、最多優勝を誇る日体大が 4 連覇を狙った早稲田を 1 － 0 で破り、4 年ぶり 17 度目の頂点に立った。

日体大（神奈川県）		早稲田大（東京都）
0	（前半）	0
1	（後半）	0

日体大が虎の子の 1 点を守りきり 決勝を制す

早稲田の 4 連覇か、それとも日体大の奪還か。立ち上がりから日体大がボールを支配しながら展開するも、早稲田もタイトなブロックを敷いて危険な場面は許さず。決勝らしく締まった試合は前半をスコアレスで折り返す。

後半も日体大が優勢に進める中でゲームが動いたのは17分だった。日体大は先日なでしこジャパン入りも果たしたキャプテンのDF大賀理紗子のフィードからMF今井裕里奈がワンツーで左サイドを崩すと、グラウンダーのクロスに最後右足で合わせたのはMF三浦桃。10番の今大会 2 得点目で先制した。

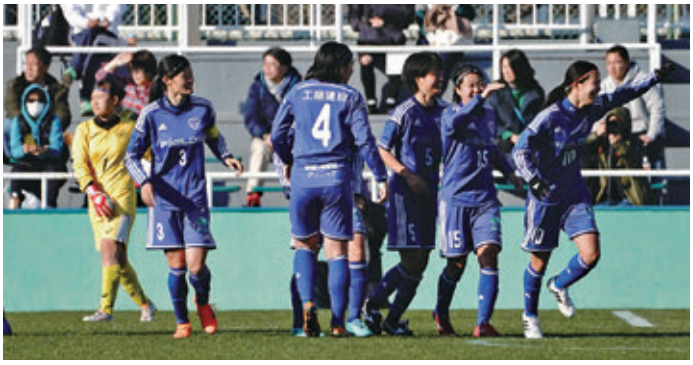
終盤は同点弾を狙う早稲田がペースアップ。主将のMF熊谷汐華や10番のFW河野朱里が次々とゴール前に入っていくが、日体大も粘り強く身体を張って対応する。早稲田は後半46分、MF八神友梨弥のクロスに河野が身体ごと飛び込んだが惜しくもネットを揺らすことはできなかった。直後に試合終了のホイッスルが鳴り日体大が 4 年ぶりの栄冠。大賀は「本当に 4 年間いろいろな経験をしてきた中で一番良い笛の音を聞いたなと思いました」と歓喜の瞬間を振り返った。

今季は日体大FIELDS横浜としてなでしこ 1 部に参戦。「我慢する時間帯であったり、試合を通してのゲームコントロールは 1 部を経験できたことが大きい」と小嶺栄二監督はいう。厳しい環境に揉まれる中で「最後まで諦めなかったり、終盤にかけてのボールへの執着心、そういう面で 1 年間通して成長できた」（大賀）ことが勝利に繋がった。

熊谷「勝ち続けることの難しさ感じた」 早稲田は 4 連覇達成ならず

後半17分に失点をしたが「ここで自分たちが勢いだけで前に行ってしまって、それで失点をしては意味がない。まずは熱くなりすぎず、冷静にもう一回守備からしっかりとやって、自分たちの狙いであるカウンターをやっていこうとみんなで集まって確認しました」（熊谷）。

1 失点で耐えると終盤はMF松本茉奈加や縦への突破力のあるMF冨田


日体大・三浦桃のゴールが決勝点に

実侑、八神を投入して攻撃に出たが、ゴールを奪うことはできなかった。キャプテンとしてチームを牽引した熊谷は「勝ち続けることの難しさというのをすごくこの 1 年で学びました」と 4 連覇への重圧を語った。

卒業後、熊谷はなでしこ 2 部スフィーダ世田谷でプレーする。「みんなそれぞれ進路はバラバラになってしまうけれども、 1 年生の時にインカレを優勝してからこの 4 年間、 4 連覇することを自分たちの学年で生意気ながら掲げて、ずっと目指してやってきた仲間だった。そのやってきた中身は必ず自分たちの力になっていると思います。これから別のチームで戦うこともあると思いますが、その点はすごく楽しみで、ワクワクしています」と上の舞台での仲間たちとの再戦を心待ちにした。

早稲田・熊谷主将

そして後輩たちには「自分たちがこういう不甲斐ない結果に終わってしまったので、この悔しさを忘れないで欲しい。特に試合に出ていた下級生に関しては、この想いが伝わっていると思うので、 1 年間また頑張って欲しいと思っています」と王座奪還を託した。

TOPICS

全国大会における東京都チームの活躍を紹介します。

優勝：東京ヴェルディビーチサッカー
JFA第13回全日本ビーチサッカー大会

10月12日～14日に沖縄県で行われたビーチサッカーの全国大会。決勝戦は、東京ヴェルディビーチサッカーとドルソーレ北九州による決勝にふさわしい激戦となった。第1ピリオド、第2ピリオドともに点を取り合い、2-2の同点。迎えた最終ピリオドは追いつかれては勝ち越されの展開となった。東京Vが3-4からスペイン代表のローレンス・ゴメス・レオン選手がわずか3分間で3ゴールを挙げて逆転。6-5で東京Vが勝利し、2年連続で日本一に輝いた。

優勝：日テレ・ベレーザ
皇后杯JFA第40回全日本女子サッカー選手権大会

女子サッカーの日本一を決める皇后杯の決勝が1月1日に、パナソニックスタジアム吹田で行われた。決勝戦は日テレ・ベレーザとINAC神戸レオネッサの一戦となった。試合は、42分に得点を挙げた神戸がリードして後半へ。しかし後半に入ると撃ち合いとなり、54分、71分に日テレがゴールを決めて2-1として逆転すると、神戸も77分に同点弾を決めて延長戦に突入した。延長戦に入ると日テレが2得点を挙げて神戸を振り切り、4-2で勝利。日テレが大会二連覇、13回目の皇后杯優勝の栄冠に輝いた。

優勝：法政大学
平成30年度 第67回全日本大学サッカー選手権大会

大学サッカーの日本一を決める全国大会が12月12日～22日まで行われた。決勝戦は、法政大学と駒澤大学の東京勢の対戦となった。立ち上がりから、駒澤大学が得意とするロングボールからの攻撃を軸に試合を展開。法政大学もセンターバックを中心に高さのある攻撃を跳ね返し、一進一退の展開に。試合が動いたのは72分。ディサロ燦シルヴァーノ選手が決めて法政大学が先制。この先制点を守りきって1-0で終了。法政大学が42年ぶり3回目の優勝を果たした。

優勝：FC東京U-15深川
○高円宮杯JFA第30回全日本U-15サッカー選手権大会

U-15世代のクラブチーム日本一を決める高円宮杯U-15の決勝が、12月28日に味の素フィールド西が丘で行われ、FC東京U-15深川とツエーゲン金沢U-15の一戦となった。試合は序盤からペースをFC東京深川が握り19分に先制点を決めることに成功した。後半に入ると、金沢が押す時間が続くが、FC東京深川も中央をしっかりと締める守備で、苦しい時間をしのいだ。すると74分に追加点。この点差を守り続けて、昨年は悔し涙を流した決勝を制して、4年ぶり3回目の栄冠に輝いた。

サッカーの本当の楽しさを知ってもらう

第 11 ブロック　第 6 回キッズフェスティバル

主　催：東京都少年サッカー連盟第 11 ブロック
日　時：2019 年 1 月 14 日
会　場：東京多摩フットボールセンター南豊ヶ丘フィールド

東京都少年サッカー連盟の各ブロックで行われている「キッズフェスティバル」。1 月 14 日に行われた第 11 ブロック（稲城市・多摩市・町田市）の模様をレポートする。

子どもだけじゃなく 指導者の質も上げる

1月14日、雲ひとつない青空の下で、子どもたちの楽しそうな声と、はつらつとしたコーチの声が響き渡っていた。東京多摩フットボールセンター南豊ヶ丘フィールドで行われた「第11ブロック第6回キッズフェスティバル」だ。東京都のジュニア年代は地域単位の15ブロック＋少女チームの第16ブロックによって大会やトレセン活動が行われている。

キッズフェスティバルの目的は子どもたちにサッカーに触れてもらう機会を創出すること。開催時期や内容は各ブロックに任せられている。第11ブロックでは技術委員会が中心となって「子どもたちのレベルに応じた学びを得られるようにするにはどうすればよいか」を何度も話し合ってきた。11ブロックの吉川正一郎副委員長が今回のコンセプトを説明する。

「サッカーに関わる仲間、サッカーファミリーを増やすことがいちばんの目的です。ただ、集まってゲームをやって終わりというにはしたくないと思っています。それでも子どもは楽しいかもしれませんが、我々がプログラムを工夫することで、サッカーにはこんな楽しさもあるんだということに気づいてもらえたらと考えています」

13時45分。開会式を終えた子どもたちがゴールやマーカーが並んだグラウンドに散らばっていく。そこからは8つのグループに分かれて、それぞれのエリアごとにトレーニングを行い、時間で次のエリアへローテーションする。

コーチから出されたボールをシュートする「シュートドリル」、全選手がGKのプレーを体験する「動き作り」、コーンの間をドリブルでかわす「ボールフィーリング」、状況判断やステップワークを養うための「おにごっこ」。これらのメニューの中には、第11ブロックのコーチが参加したJFAグラスルーツフェスティバルからヒントを得て作成されたものもあるという。技術指導部で普及担当を担う原田直樹氏は言う。

コーチは子どもたちの目線に合わせて、一つ一つのメニューを丁寧に説明する

「今回は4種類のトレーニングを行いましたが、それぞれ目的があります。あらかじめ、各エリアを担当するコーチたちとも、このトレーニングはどんな狙いがあるのか、どんな声かけをしてほしいかといったところを共有しました。」

メニューの中で目を引いたのはGKの動き作りだった。今回の参加者はGKをやったことのない子どもがほとんど。コーチが投げたボールをうまくキャッチできると、子どもたちは目を輝かせていた。

「普段トレーニングしているところがクレー（土）のグラウンドというチームも多いですが、ここは人工芝のグラウンドなので、セービングをしても痛くありません。GKに対して怖そう、危ないという先入観を持っている子どももいるので、こういうトレーニングをきっかけに興味を持ってもらえたらと思っています」（吉川氏）

また、一つのトレーニングが終わったら、すぐ隣のエリアに移動して次のトレーニングが始まるため、子どもたちが手持ちぶたさになる時間はほとんどない。これは「自由時間ができると、どこかに行ってしまったり、その間に別の遊びをしたりすることがあった」という過去のキッズフェスティバルの反省が生かされたものだ。

GKの動きを体験するトレーニング。子どもたちが目を輝かせて取り組んだ

トレーニングが終わると休憩を挟んでゲームの時間へ。ここでも「子どもたちのレベルに応じた学びを得られるようにするにはどうすればよいか」という視点が発揮されていた。

コートを狭くしてシュートの意識を高める「シュートゲーム」、コーンを並べたゴールをドリブルで通過したら点数になる「6ゴールゲーム」、味方同士が手をつないでゴールを守る「手つなぎGKゲーム」、そして4対4での「ミニゲーム」。

この4種類の「ゲーム」には、その前にやったトレーニングとのつながりが見られた。「シュートドリル」の延長上に「シュートゲーム」があって、「ボールフィーリング」と「6ゴールゲーム」は狙いがリンクする。そのため、トレーニングでやったことが自然とゲームの中で出せる。

「キッズフェスティバルのもう一つの狙いは、ここに参加したコーチの方に新たなトレーニングを持ち帰ってもらうことです。そうすることで、指導者も子どもの質も上がっていくと思っています」

15時45分。3時間ほとんどノンストップのキッズフェスティバルは閉会式で幕を閉じた。吉川氏は子どもたちにこんな言葉をかけた。

「今日一緒にサッカーをしたみんなの名前や顔を覚えましたか？今度試合会場などで会ったときは、恥ずかしがらずにぜひ挨拶をしましょう。サッカーでできた仲間を大切にしてください」

多くの学びと、たくさんの仲間。キッズフェスティバルは子どもにも指導者にもポジティブな影響を与えたはずだ。

プログラム

トレーニング①	シュートドリル
トレーニング②	動き作り（GKにチャレンジ）
トレーニング③	ボールフィーリング・ドリブル
トレーニング④	おにごっこ
ゲ　ー　ム　①	シュートゲーム
ゲ　ー　ム　②	6ゴールゲーム
ゲ　ー　ム　③	手つなぎGKゲーム
ゲ　ー　ム　④	ミニゲーム

第 11 ブロック　副委員長
吉川正一郎（町田相原 FC）

第 11 ブロック　技術指導部　普及担当
原田直樹（町田 JFC）

東京都自治体職員サッカー連盟

会長
斉藤　功

自治体職員サッカー連盟は、日本サッカー協会に第1種登録した都内自治体職員サッカー部26チーム（2018年度の加盟チーム数）で構成しています。都庁、東京消防庁、区役所8チーム、市役所15チーム、町役場1チームの26チームです。主な事業は、①全国自治体職員サッカー選手権大会東京都予選会の実施 ②関東自治体職員サッカー選手権大会東京都予選会の実施 ③フットサル大会の実施 ④関東自治体職員選抜交流大会への参加 ④全国自治体職員シニアサッカー大会への参加等です。

加盟チームの大きな目標は、全国大会および関東大会への出場です。毎年5月から6月に全国大会出場を争う東京都予選会を、9月に関東大会の東京都予選会を行います。第47回全国大会（8月別府市開催32チーム出場）の東京都出場枠2チーム決定をかけた準決勝は、八王子市2−0杉並区、町田市1−1（PK5−3）東京消防庁でした。市役所2チームの全国出場は久々でした。

31年ぶり2度目の全国出場の八王子市は1回戦で函館市に1−3で、2年ぶり15回出場の町田市は、鹿児島市に1−4でいずれも敗れました。全国大会のベスト4は、32回目の優勝を果たした藤枝市のほか、藤沢市、鎌倉市、市川市の南関東地区勢の3市でした。

また、第46回関東大会（10月さいたま市開催12チーム出場）の東京都出場枠2チーム決定をかけた準決勝は、八王子市1−1（PK5−3）練馬区、東京消防庁1−0世田谷区でした。

全国大会出場に続く関東大会出場の八王子市は、1回戦で川口市に1−2で敗戦、第31回から第42回まで関東大会11連覇の実績がある東京消防庁は、2回戦からの出場で、鎌倉市に0−2で敗れました。関東大会は、開催市のさいたま市が優勝、2位藤沢市、3位鎌倉市という結果でした。

自治体連盟は、競技場等施設整備に主体的に取り組み、サッカー大会等を通じて選手の健康増進や親睦、交流を一層深めるため組織強化、加盟促進（特に区部）を図るとともに、東京都サッカー協会と連携、協力して参ります。

全国大会出場の八王子市役所サッカー部

全国大会出場の町田市役所サッカー部

オフィシャルサイト
http://www.tokyofa.or.jp/category/league/jichitai.html

東京都地区サッカー連盟

委員長
石川雅彦

東京都地区サッカー連盟は、各区・市・町サッカー連盟（協会）と東京都サッカー協会とを結ぶ唯一のパイプ役として、大会の開催、主管、情報交換など連携を密にすると共に、将来の組織化を念頭に置きつつ、サッカーの普及に努力しています。2004年より東京都社会人チャンピオンシップ戦に区・市・町の代表チームの参加が認められ、大きな励みとなっております。

また、毎年春に都民体育大会サッカー競技を、夏には区市町サッカー選手権大会を主管・運営しています。2019年度は第72回都民体育大会を4月28日〜6月2日に、駒沢第2球技場補助競技場他にて東京都・東京都体育協会主催、東京都サッカー協会主管で行います。

第13回区市町サッカー選手権大会は6月30日〜7月28日に、練馬区大泉さくら運動公園他にて東京都サッカー協会主催、東京都地区サッカー連盟主管で行います。

今後も東京都サッカー協会と各地域の情報交換と相互理解の促進に努めていきます。

第71回都民体育大会

順位
- **優　勝**　板橋区
- **準優勝**　青梅市
- **3　位**　新宿区
- **4　位**　三鷹市

第12回区市町サッカー選手権大会

順位
- **優　勝**　irrumattio3（千代田区）
- **準優勝**　ブルーノーツ（新宿区）
- **3　位**　RedPlumFC（板橋区）
- **4　位**　砧ドリームス（大田区）

都民体育大会優勝の板橋区

区市町サッカー選手権大会優勝の千代田区

オフィシャルサイト
http://www.tokyofa.or.jp/category/league/chiku.html

東京都高体連サッカー専門部

副委員長
玉生謙介

東京都高体連サッカー専門部では昨年度から全国高校サッカー選手権大会東京都二次予選決勝戦の選手入場の際に、エスコートキッズと一緒に入場することを実施しており今年度も実施しました。

東京都高体連サッカー専門部の活動がより充実し、発展していくためには、子供たちにとって魅力的で夢を与える存在であることは必要不可欠です。その一つのアクションとしてエスコートキッズを採用しました。勝てば全国大会という決勝戦で、気合のこもった選手たちと一緒に駒沢陸上競技場を入場する経験は、おそらく一生忘れない思い出となり、財産となったはずです。リハーサルから緊張した面持ちではあるものの、ワクワクした様子で本番までやり遂げた子供たちは喜びにあふれており、「選手としてこの場に戻ってきたい!」という夢と希望を持ってもらうことができたと思います。

今後もこの活動を続けていき、選手権の決勝のみならず実施する機会があれば積極的に実施していきたいと考えています。この取り組みは他県でも賛同され、今年度から全国高校サッカー選手権大会（本大会）でもエスコートキッズが採用されました。

エスコートキッズに限らず、子供たちに夢と希望を与える活動をこれからも考えながら実施をすることで、東京都高体連サッカー専門部の活動を充実させていきたいと思います。また、その取り組みが東京から全国へ広がり、日本のより良いサッカー環境整備へ貢献していきたいと思います。

駒澤大学高校

帝京高校

国士舘高校

大成高校

オフィシャルサイト
http://www.tokyosoccer-u18.com/

東京都クラブユースサッカー連盟

鈴木泰徳

6月より東京都クラブユースサッカー選手権大会U13・U14を開催していますが、早期にリーグ戦を敗退したチームや人数を多く抱えているチームの選手のために、2008年度より東京フレッシュカップを設立しており、今回で第10回を数えるまでになりました。加盟登録100チームを抱える当連盟ですが、今回も参加チームはU13が40チーム、U14が41チーム参加しています。

10月から開催されたこの大会も2月3日に、味スタ西競技場という最高の舞台で決勝戦が行われました。U13はFCトリプレッタとForza`02の決勝戦となり、両チーム得点の入らない展開でしたが、後半27分Forza`02槇島健人選手のミドルシュートが決まり1−0で、Forza`02が優勝しました。

U14は東京久留米FCとスクデットの決勝戦となり、前後半2−2で決着がつかずPK戦へ。両チーム合わせて26人が蹴ったPK戦は7−6で東京久留米FCが制して優勝しました。

来年度以降も、より多くの選手が参加できるように取り組んでいきたいと思います。

第10回東京フレッシュカップU14

順位（1部）
- **優　勝**　東京久留米FC
- **準優勝**　スクデット
- **3　位**　FC VIDA

第10回東京フレッシュカップU13

順位
- **優　勝**　Forza`02
- **準優勝**　トリプレッタ
- **3　位**　FRIENDLY AZ`86 東京青梅

フレッシュカップU14優勝 東京久留米FC

フレッシュカップU13優勝　Forza`02

オフィシャルサイト
https://tokyo-cy.jp/

アストラ倶楽部

東京都社会人サッカー連盟

東京都社会人１部リーグで活動するアストラ倶楽部。暁星高校サッカー部の出身者を中心に構成されるクラブは、1918年に創部され昨年100周年を迎えた。サッカー界を始め、さまざまな分野に優秀な人材を送り込んできた、アストラ倶楽部とはどんなチームなのか。

TEAM PROFILE

［正　式　名　称］アストラ倶楽部
［創　　部］1918年
［OB会員･会友総数］約650人
［総　監　督］玉田知也
［監　　督］川島拓
［主　　将］浅間翔大
［所 属 リ ー グ］東京都社会人サッカーリーグ
［所　属　連　盟］東京都社会人サッカー連盟
［主　な　実　績］天皇杯優勝（1924年）

かつて天皇杯も優勝した歴史と伝統あるクラブ

東京都のサッカー界において「暁星」の名前はまばゆい輝きを放つ。全国高校選手権出場10回、全国高校総体出場11回。そんな強豪・暁星高校出身者を中心に構成されるチームが東京都社会人リーグにある。「アストラ倶楽部」だ。

暁星サッカーの始まりは、1909年にフランス人の教員テオドール・グットレーベン氏が、グラウンドで「バローン（フランス語で大きなボールの意）」を教えたのが始まりとされている。アストラ倶楽部の創部は1918年。アストラの由来については、ラテン語のASTRA CASTRA NUMEN LUMEN（星は吾が営　神は吾が燈の意）から、星を意味するASTRAを冠し倶楽部名としたとのこと。キリスト教宣教師によって創設された、暁星学園らしい名称の付け方だ。

そう語るのは、アストラ倶楽部の会長を務める揚伯裕（ようはくゆう）氏。百周年事業全般を統括し、創部百年史の編纂や創部百周年祝賀会の開催に尽力した人物だ。揚氏は1枚の写真を見せてくれた。そこにはユニフォーム姿の選手と暁星の制服である学ランを着た学生が映っている。

「これは1896年2月11日に撮影されたものなのですが、日本で最初のフットボール部が設立されたとされる1896年3月よりも前にあたります。また、1896年2月15日付、The Japan Weekly Mail誌（横浜開港資料館貯蔵）の1面に、横浜のクリケットグランドでの試合の記事が掲載されていることも判明しました。百年史編纂を通して発見された、この123年前の写真原版は、日本サッカー黎明期の資料として一昨年の11月、日本サッカー協会にてデジタル補正されたものが保存されています。この事実は、日本サッカーの歴史を塗り替えることになるかもしれません」

どちらにしても、アストラ倶楽部が日本サッカー黎明期に立ち上げられたクラブの一つであることに間違いはない。その歴史の中でも特筆すべきは、1924年に第3回全日本サッカー選手権大会（現在の天皇杯）での優勝だろう。前年度に準決勝で涙を飲んだアストラ倶楽部は、翌年も決勝に勝ち上がり、名古屋蹴球団を2－1で下した。

「当時は厳密な年齢制限やカテゴリーはあまり意識されておらず、天皇杯も旧制中学（現在の高校）と師範学校（現在の大学）が混在していたそうです」

その後、全国大会から遠ざかって「古豪」と呼ばれるようになっていた暁星が復活を遂げたのは1984年。林義規監督に率いられた暁星高校は26年ぶりに全国高校選手権への出場を果たすと、そこから11年間で全国出場8回という黄金時代を築く。

こうした暁星の復活は小学校からの地道な取り組みに要因がある。1964年から小学校にサッカーが取り入れられるようになり、4～6年生で選抜チーム（アストラ・ジュニア）が結成されて対外試合を積極的に行うようになっていった。

そして、1984年以降、暁星を卒業した選手たちが、社会人チームとして本格的に活動するようになっていく。暁星サッカーのルーツである「アストラ倶楽部」の名前を背負ったチームは、1985年には東京都社会人リーグ4部に再登録すると着実にステップアップし、1997年に1部昇格を果たした。2部降格を経験しながら、2007年以降は1部リーグで戦い続けている。

アストラ倶楽部
揚伯裕会長

アストラの輪は社会人サッカーにとどまらない。シニア世代からジュニア世代まで一緒にボールを蹴るアストラ・フェスティバルが毎年末に行われ、シニアチームのアストラOver40、社会人1部リーグを卒業した選手たちによるアストラ・トランテーヌ（フランス語で30代の意）など、それぞれの場所でサッカーを楽しんでいる。

2018年10月28日に開催されたアストラ倶楽部創部百周年祝賀会には世代を超えて約150名が集まった。最高齢OBと最も若いOBの年齢差が65歳と言う事も驚きだ。100年という歴史を刻んだクラブの魂は、これからも脈々と受け継がれていくに違いない。

東京都社会人リーグではアストラ倶楽部は1部、セカンドチームのアストラ・トランテーヌが4部に在籍

技術委員会

昨年4月に東京都サッカー協会専任ユースダイレクター（以後YD）の職に就かせて頂きました。JFAが47FAにYDを設置してから12年目となります。その初年度からYDとして東京の育成に携わらせて頂いて来ましたが、昨年度までは都立高校の教諭としての仕事や自チームの指導等もあり、YDとして満足できる活動ができていませんでした。この度「専任」となり、東京の育成のためにフルに時間とエネルギーを費やすことができる環境を頂くことができました。東京から世界で活躍できる選手を育成・輩出すべく、情熱を持ってその任に携わらせて頂きたいと思っています。よろしくお願い致します。

専任となってこの期間、U-12からU-18まで様々な年代の活動を視察させて頂きました。また、現場で多くの指導者の皆様からお話を伺うこともできました。その中でYDとして考えたことを、この紙面をお借りして3つお伝えさせて頂きます。

1.都及び地域トレセンについて

現在、都ではU-12～16、地域ではU-12～15のトレセン活動が行われています。専任初年度として、この1年はU-12年代を特に力を入れて視察させて頂きました。都トレセンだけではなく、各地域へも足を運ばせて頂きました。まずは、その現場で目にしたトレセン指導者の方々の熱意とその指導に感謝を申し上げます。

U-12年代はフットボーラーとしてのベースを「積み上げる」ことが重要です。東京から優秀な選手を育成・輩出するためには、その積み上げを全都のトレセンで共有することが必要です。そこで、来年度より都トレセンU-12と地域トレセンU-12のトレーニングメニューを統一することにしました。内容としては、ナショナルトレセンやC級コーチ養成講習会で行われているトレーニングをベースにしたものです。各トレセンで行うトレーニングのテーマの実施順番も揃え、地域から都へ、都から地域へ選手が異動しても積み上げに支障がないようにしました。しかし、紙ベースでトレーニングオーガナイズを揃えるだけでは、実際の現場でコーチングにズレが生じる恐れがあります。トレセンコーチのトレーニングに対する理解を深めそのズレをなくすために、今年度の地域トレセンコーチ研修会の場を活用して、統一メニューの伝達講習を行い、積み上げの共有を図ることにしました。指導者の皆様には、是非トレセンの現場へ足をお運び頂き、トレセンコーチの指導をご覧頂きたいと思います。

2.リーグ戦の質の向上

U-18のFAリーグ（Tリーグ）が始まって14年が経過しました。その間にU-15リーグも整備され、U-12リーグも4年前にスタートしました。現在では、リーグ戦の意義は選手や指導者、そして保護者にも確実に受け入れられていると思います。今後は、リーグ戦の趣旨を大切にしながら、ゲームの質をより高める取り組みが必要だと考えています。

現代サッカーは「ハイスピード&ハイプレッシャー」の中で行われ、全ての場面でインテンシティが求められています。故に、ゲームの質を高めるためには、強度の維持が必要不可欠です。しかし、現状はどうでしょうか。全てのリーグ戦でその強度が保たれているでしょうか。定期的に真剣勝負の試合が組まれていることがリーグ戦の利点でもある訳ですが、既存の大会と混在し過密日程となり、選手たちは疲弊していないでしょうか。疲弊した中で強度を求められても、そこには無理が生じます。自然に強度が下がり「緩い」ゲームになってしまうことは避けられません。緩いゲームは何試合経験しても得られるものは少なく、積み上がりも期待できません。

日本人は「やり込む」ことを良しとしがちです。「More is More」の考え方です。しかし、それはサッカーにとっては逆効果です。サッカーのゲームは強度が保たれてこそ価値があります。「Less is More」の考え方を持ち、選手たちの体力やモチベーションを考慮したゲーム環境を整えなければなりません。各リーグ戦で常に質の高いゲームが行われるように、指導者の皆様にゲーム環境に対するご配慮をお願いしたいと思います。

3.指導者養成と「育成」

「指導者しか選手を変えることができない」という言葉があります。これは、決して指導する側の驕った妄言ではありません。選手育成の成果は指導者の力によって大きく変わります。この言葉は指導者への戒めだと受け止めるべきものだと考えています。

今年1月に行われた「第3回東京フットボールカンファレンス」の講演の中で、ヨーロッパの育成環境の視察報告がありました。その報告の中でも「育成の成功のポイントは良い指導者を育てること」という言葉がありました。選手が指導を受ける環境は、自チームであったりトレセンであったり一様ではありませんが、どの様な環境でも指導者の質がトレーニングの質を決め、選手の成長を左右することは間違いありません。

現在、JFAは「B級スタンダード計画」と銘打って、2030年までに選手30人に対して1人（現在は160人に1人）のB級ライセンス保持者を養成する考えを示しています。また、「トレセン認定制度」ができ、2020年には都も地域もトレセン指導者はB級以上でなければ指導に携わることができなくなります。これは上述した様に、育成の成果と指導者の力量が密接に関わっていることを、JFAが十分に認識しているからこそだと思います。

育成環境を向上させるためには、指導者の質の向上は欠くことはできないものです。東京から世界で活躍できる選手を育成・輩出するためには、東京の指導者の更なるレベルアップが必要です。ライセンス保持者を養成すると共に、ライセンスを取得した後も一人一人の指導者の成長を促す「指導者の育成」も、東京都協会の取り組みとして必要であると考えています。東京の全選手が日常から質の高いトレーニングを受けられるように、指導者の皆様にも自ら指導力を向上させる取り組みをお願いしたいと思います。

今後、様々な現場で皆様とお会いすることになると思います。その際にはお声を掛けて頂き、お話を聞かせて頂ければ幸いです。よろしくお願い致します。

東京都サッカー協会ユースダイレクター
齋藤 登

AFTER THE MATCH
ロストフの14秒に想う

昨年末にNHKで放送された「ロストフの14秒」はとても興味深かった。見た人も多いのではないだろうか。

ワールドカップロシア大会・ラウンド16、日本対ベルギーの死闘、その残酷な結末を、関係者の証言を交えながら、さまざまな角度から分析したNHK制作のドキュメンタリーである。この試合の90+4分、ベルギーの電光石火のカウンターにより、またしても日本はベスト8入りを断たれることとなった。

「ロストフの14秒」は「ドーハの悲劇」と並んで、日本サッカーが経験した歴史上の教訓として、ことあるごとに語られて行くことになるだろう。

まず、ベルギーのカウンターの引き金となった本田圭佑のCKのプレーの選択について、元イングランド代表監督・カッペロは、あり得ないＣＫを蹴ったと言い、近くにいた香川真司に渡し延長に持ち込むべきだったとした。同様のことをアギーレも言っていたらしい。セオリーからすれば、ビッグゲームの前・後半最後の５分間に点を取りに行ってはいけないのかもしれないが、はたしてあの場合どうだったか。日本チームは延長にはしたくなかった。相当に疲弊していたのは明らかで、延長になれば持たないと思われた。そして日本人の誰もが、あのCKを支持し、コロンビア戦の「半端ない大迫のヘッド」が再現されるのを期待したのではないか。

だがベルギーは日本のセットプレーを研究し、あのCKのコースは完全に読まれていたのだ。クルトワは難なくボールをキャッチし、デブルイネはゴールラインに近い位置から、ノーマークで走り出していた。ここが日本にとって最も教訓としなければならないところだろう。決着をつけに行くにしても、相手のカウンターに対する備えは忘れてはならない。そしてカウンターを受けにくいCKを工夫する必要もあるだろう。

そして良くも悪くもポーランド戦の影響である。日本は結果的にはラウンド16に進出したが、この試合の消極的なボール回しは、さまざまに批判も浴びたし、監督も選手も誰もが不本意だったに違いない。だからベルギー戦は全員が攻撃的な姿勢を貫き、消極的なプレーは絶対にしないと決意していたことだろう。この団結と意志統一が迷いのないプレーを生み、原口と乾の得点につながったと思う。しかし最初から全力で飛ばしてきたツケが２得点を境に回り始め、最初の失点の引き金となった長谷部のパスミスは消耗が始まったことの現れだった。

しかし長谷部はさすがだった。14秒の最後、ムニエからのパスをルカクがスルーした時、長谷部はルカクのシュートコースに身体を寄せ、同時に片隅にスルーの可能性を感じ、右足を出している。その残り足にボールが、わずかにかすっているのだ。だがそのタッチはボールのコースを変えることはできなかった。

ちなみにあの得点に要した時間、実際どうだったのか、FIFAの公式ビデオを見て実際に測ってみた。その結果、本田のコーナーキックからシャドリのシュートがゴールに入るまでが14秒、GKクルトワがボールをキャッチし、デブルイネにボールが渡った瞬間からゴールまでは10秒弱だった。この番組の重要なテーマの一つが、本田のCKからのプレーの選択になっているので「14秒」というタイトルは妥当だと感じた。

最後に、やはりオシムは心に残ることを言ってくれる。「故意のファウルは日本人らしくありません。日本人はフェアプレーを重視することで間違いなく損をすることが多い。望ましい結果が得られなくても、そこが日本人なのです」ベルギー戦の絶望が４年後の希望になることを期待したい。

東京都サッカー協会名誉会長
上野 二三一

Tokyo FA News 2019 vol.30
発行元 （公財）東京都サッカー協会 〒113-0033 東京都文京区本郷3-10-15 JFAハウス6F TEL(03)6801-8001(代表) 平成31年3月31日 発行

憧れを絶やすな。

戦後の日本には憧れが足りなかった。1日、1日を生きることで精一杯だった。
そんな時代に、東京1964オリンピックという憧れの舞台を用意した男がいる。
田畑政治。戦前、朝日新聞の政治記者だったその男は、
同時に水泳の指導者として日本中から発掘した才能を育て上げ、
オリンピックや国際的な大会でメダリストという憧れの的を生み出していた。
憧れを力に変えて、純粋で清々しいスポーツのすそ野が広がっていけば、
日本の未来はもっと明るくなっていく。田畑政治の信念を受け継ぐ私たちは、
これからも憧れを絶やさぬようスポーツを支えていきます。

ともに考え、ともにつくる
TOKYO 2020
朝日新聞
東京2020オフィシャル新聞パートナー
朝日新聞社はオフィシャル新聞パートナーとして、
東京2020オリンピックを応援しています。